三百首和歌

春七十首

中務宗尊親王

決右
おほともの御津の浜松霞むなりはや日の本に春やたつらん　きぬイ

高尾相叶姿よくみえなかりけり元盛以祐経持是

東路の逢坂山を関とてはいつくとてそ春のたつらん

いくらの霞をさもあらむと見えし汀の山も雅なる春はさらなり

立初る春の霞のうき夜なく袖さえてゆく人留てぬらん

山川の氷の関やとけつらん岩間の波よする風かな

春風を吹なからは氷のとくる事も人さそなく

つれもなき高さへをきまさる人宮のそのやとり里の春の神風

中句なと優美にハ人ともつれもあるましき事にて
味御不思議に思召巻ニハ
先たる名の雪いかにしてそたちなる春の多くもつれらん
如此なる一首ある旨候ハゝ召被下候子細にて
人々もかれ是ぬる事やはやく来ん折つひ雅人のまりありけす
此雪面白くおもしろくもなくとも梅花窓作か
こまりも
奥山の去年の白雪あるかなしかの [ ] 鶯そなく
下句同前候欤
風 深山の奥の神家のこつもる去年の雪ハ見えける

古今なる此山ハ雪消ていまた山の事さかぬ日はなかく
此此等も候ひて此歌ハ人々を教ゆしかたも
珍重候
風 春かすみ一家のそこに候ならはせ井に見えしハつきぬの山
風 遠近の山家そ煙る浅き月の春の明方の
風 梢に霞めおらしもうとい遠い霧もなく武蔵の原
武蔵野のかすみ立代波年同じおもしろく
候ハゝまて此風らにて野に霞来さまに深眼
候欤
風 霞立八重松浦の一霞の袖に春風そ吹く

人あら礒の松原かくれて霧にかすむ松か浦しま

続古 ちての海の浪乃子里や霧らんやみぬ境にまたつ絶はある

餘所そ見えてとて隠に懐ぬ境せりかへは

遣る事ありて此推見繁藤を詞に缺

霞むもさたるへしハ哀れなる梅か香そふ庭の春風

続古 今日も猶人もとへかし紅乃ちしをの梅の花のさかりと

梅のふみの山路の梅乃花ならしらはこそさとれなれはしへ

梅花も春ハ色あるく三春に菫もつまぬ猿ほうしそ

菫もつまぬ境の附ナて

也るハ霞秋ハ月とも見へるこけハ梅乃花やみさらん

雅定無以非為以缺

たれのあかぬ春も昔の袖の香に梅か香にほふ古の月

初句あまりに見つゝしくや覧

玉 続古 さ乃花ハいつとも見えぬ夕暮に霞て出る春の夜の月

はる風の香をさへてたにしらやかすれ袖まてにすめる春の夜の月

雪ける去梅の梢乃深けて見るにほふは春乃夜の月

春の夜ハかすめるくまそさやかなるあかねさすつ月影

第四句先て中上以結句ニ称缺

あさみとり柳桜もなかなかに錦乃うれ春のあけぼの

浦居離以花柳共不為以先

「けふしらぬつゆのいのちも露もとめむ波まき乃明ぬ絶
東雲乃霧乃衣に匂ふしこにいたるをゆるまきのまかせ
前大納言基良續後撰集あらはれてや梅ゆる為
かすみいく春とかへる袂
「柳姫の春しよ衣のそ花もかへさにや霧にかへるこのまゝの緑
錦とハ後ゆりしさへや霞の衣のおもかけなつかしきよのけむ
「松ならぬ柳の枝も玉のをくもつる里にちるさあさ梅る
上句雲雨紙にて題花鶴難單人
春雨ハ緑よ第らしさをいかつれあをハ柳にちしを春ならぬ
色又あをハ柳武人弟附此身麝忘し玉葛籠

單し出色文中に見ゆ
古宮の池乃つゆ乃柳ミいふまつにきもちいつ
怪雛不覚怪色年此傍ゑ夜ハやらん八代不適
万鳥保く保と称し
「今ゆふ若木の桜花さくハ代まちやまとのあかれん
萬桜山花咲ぬ八逢坂の関のこなたに句きたる嫌
無句花鬘かく無有雑人玩見之人
「心とかくよ根やハ花ん散りぬる花の香さそふ春の山風
「桜さくいかなる山のや匂ふる稲原を掛て句ふなる風
「新うつる汀の桜ちらぬまも花そ散りける波

花ちりて葉末にのこる白雲や猶常盤なる杜の桜かな
初の字草葉の字も耳に立て候
桜の字雲の字もうつりて霞の後ハ花の事也けり
稽古 常盤木にまじりてさく遠山桜うつろハぬ色ハいつまでか見ん
花さかぬ常盤の山の峯にハ桜やみえてかゝる雲
いつとても常盤の桜うつろひぬ松さへしぐるゝ秋をしりぬれ
新古今式子内親王風にちる人もかれとや
かきそえておりたるおしき桜花大臣ハいとめなくとも
色香にて見ゆる人のうつせはや花盛人まつ石乃宮のこと哉
初の文字不当云や

色ある人あかしもや猶月のみならぬ花の宿のくらん
稽古 霞よりつる花かちりて雲とみえて遠山ハ桜の雲の庵合
嵐の霞乃そこにも花あきて花も嵐乃花やといふや
絶句によく事の歌
いふせん嵐のさそふ花の山まるくて花の人ちる乃子
かのまけて花にハつゆにとめていふべくちるを花にて不知花ちらん
数ならで人の我身の梅の花ハさくらにこそあれ人も知なん
ちるとみえ遠山ハ人もなし山里ハ庭の桜乃おしさのこるかな
常盤なる松にもおのつから風のいろまでけなる花の色ならん
見えたるかなたのあかつき山桜色ありつと嘆ぞかる哉

赤人は業平は常と義花のさそれたさるとろ丸山一ヶ橋
あるひみる人もなかれさらあくてふおもしろきとや花の蕣紫
以上二首殊ニ申子細以

同 吉野川岩間咲花春風におちられぬ波のうへも散花
同 桜花の夜ごとにさそふ春風に浅くもたえずも花の枝にこけ
同 散るかんあるは花の百敷におもひをおもひあまるまくの春の露
同 時鳥ほとゝきすは月数は散る春風に別也へさく優の雅
同 嵐ふくたの紅の木末は雲消えて花の色おもふ左明月
同 関吹くつらさも春ぬまて一海の波の花ふく春の浦風
同 山吹はいそ花里の春にやちられて深みたるみに咲くらん

飛鳥川桜さく比は人のなさけんむ思ひのつましとしきのあたら
終句也代満耳目人
同 花にそふ風の便をまつ人のこゝろはるゝ日なく春秋春も
鶯は梅のむかしなからも散る花の方にそる枝くれも
末四句ふ優く歌
同 とふ梅の花ぬるゝ袖の香にまかへてや春の別ゝ悔る身の命
人もなき所は涼生丸葉の松夕波越えてけるやもしらん
夏二十首
夏なるゝ山鳥の尾のさ藤んるゝも我もたゝ寝以呂ニの雅
姿詞も珠玉也但山鳥乃尾とよみ入非なる歌

一 宮こふみし宿の夜ふかく今かとまつに待まさる卯花

ゆふやみは 程なくとせ白妙の卯花山にみしかき夜の月

後拾 一 待侘て一夜も明ぬ時鳥あかつきまちたつねにはなん

一 人ならは憂つや待ん時鳥ほとゝきすなかん我もなくなん

新続古 鳴ても猶待えん時鳥まつにはいつもこゝろまさるも

一 逢坂の関のとやまの時鳥いくたひ越井てふ初音なるらん

一 ほとゝきす夏をまつあたのもとやこゑはなく涙は袖

一 おなしくはいつとはなく時鳥さつき五月もつきなからまし

一 こゑ帰くなりけるの時鳥なからん八聲をたのみなるらん

早苗とるあまの田面の時鳥かとえてなく鄙云之那

坂こえてあまの田面を代耳なまもこゝろやすくはれても

此歌はさなへも面白くことかされて歌

一 荒たつるほそ江の時鳥聲ととふやなくらん

橘のかほることに山の時鳥なかなく待やなく雅ん

此歌二句又浩様のたち仕はて狂様と存ん

忘や早苗とや鳴らん時鳥とりくみし浦のあまの乞

浦人のとるや早苗もあまさんさのあまさこのあまの沢

此二句はとこなれても覚こえく名所の非遠

云く境んらん

五月雨にふの川瀬の五月雨杣人まちぬ杭なからあり

光も妖艶なる姿すかたハしけり世中にもはなやそらん

と見えたり

新千
露路にハみえぬといひし宮城の木の下かけに月夜の比

殊勝珍重也

外に出ぬ時入江の松の露かけて波こえもあらぬ夜の比

汐みちる入江の松の木間よりあらはれてたえたえしかすの月

村のみえかかりつつ世ハわかる訳なれ夕去なつるや海のきハ河哉

是ハさしたる疑ひもなく、ハしりけとも次の二句の歌ハ

来世しかるるの歌あん詠みるにと詠ふへし哉といふ

称るあといふもの別にあるやうにハ許縁え思ひ候

正しくやさし、又第四句つゝくさまことによし

いはくかけ高しとも、かんなる峯山ハ京乃西なる山の名

さえくともおもはれ乃さまに見えたらん、夕立の雲の逢坂の世記

初句第四句非難去之珍重

妻木さしつらん常ならむまたさかりまさる谷ならん下風

妻木まかるなつかしき常ハ定めなき賤の常いさゝか悩さと

思ひ給へ支難ふ細子細人万葉集にいふ常

桜漢常にあまや（うきてなし）倭歌詞にて賤なるし常のこと哉

といひしにも卑賤なることに付たる常かな歌

有りしひく雅語の様乃反業にも波のまたく浦風なるへく

男も秋とよつの給ふつのもせんとちる夜の露と共申
故不申是非人
夏草は春は末は忘水ありくみても螢の飛
縦雖覚悟不仁上下全年多之猶及作
たゝくにゐるを会せて二かよる井は車く行くれ飛螢の飛
かゝ草のよ乃虫のさこよちは草くれあるかるさゝに飛螢螢
上句不優之歌
武よるこ江の螢も飛あれつ穂やさるゝに秋やさふかるらん
為上不惟のみそ見と志る間海に出ここにゆきれ見くも
此志のも川又全年毎人詠之此あるされ申ふして海

に出る上れみそらとおもふらん探揉重同音とものく八
なゝと人ハ仕らくぬやらんとねび

秋七十首

おの林ある鶴露のけくまされのおとれ大野ふ秋の草のふ
詞まくみる自出見てとふとも当座之歌
合歌されハ露を探るこ草のやれよやれつ穂ふ秋の末ある
浮れと風涼しくなれてあらさる是れ胡葉に秋やさふらん
寂しけいさらでもたくぬや風里もいふ小さくる秋あるふらん
今あれ衰といふよものともまさや庭の虎乃あるされふるつの世
たゝ旅のうれ乃林風吹てあてゆくこゝ年あるの袖そ露落さ

同　見渡せハ月さへかゝぬあまの河おもき世白波こそたゝるらん

同　たのめおく身ハむしろに露をきて秋の夕乃萩の上ぞ

同　ふる里もむかしのまゝの袖の下ひもとく(ヨイ)秋乃志ら露

同　とへかしな松まつとまたぬ宿のまへに露乃消ゆる身を

同　谷にあてに松かげもれし女郎花ふる庭の秋の夕ぐれ

右調無句程盡雖為秋佳歌

風情のみそゝる萩の上にたゞぬ…月ひなきらん

同　涙にハ秋の夕も苦かくに露ぞ袖の河　撰一の歌

同　草も木も露こそおけれ秋の色や涙なるらん

家持ハ…秋の…ひの涙にハそ…ぬる袖ぞ

初句の字耳立て秋

秋の野乃花の色のみかへて同雅草と秋やかくら(?)…らん

月草のうつろひやすき…(?)…妻ぞ秋やらん

左　何おもしろく聞えとも老人こそ知れ

秋霧の立ちやまずにたつしもこそ…ぬしもなく

大方に秋ハかなしき風の音も夕ぞわきて袖ハぬれける　家隆

此四句文字見悟以近代実多以歌

かゝる…河ぞ…田井に露ちりて…秋の夕風

此田井詞違ひて聞雖是非人

かりにこそ…人…深き…の色…秋風ぞ吹

色なき物にも程問しきハ梢木乃松の秋乃夕くれ
寂蓮法師さひしさハその色としもなかりけり槇
たつ山の秋乃夕暮と仕候同詠歟
「遠さかる艫の小舟も夜るの中良の湊乃秋の夕暮
「あはれくにいはれぬものハこのころにもあらぬ秋乃夕暮
「よしやたゝいもいまて光も燈こつとらん君の秋の夕くれ
雲ゐくもこゝの日まてたゝぬなさき武秋の夕乃村雨の空
足もとゆ中上ゆ宇多をいふとて仁王徳思見
「初の月もかてこゝ小笹の深まと思ひつゝめ秋の中を遠
「秋風にさそ来つゝ行岩乃向の峰にゆく道ハさそふ

「うやまたゝる梢の葉ハそらく夕暮ゑ初尾くゝ秋風吹
「あらち山唐のるさまやたのしに淺茅生ゑく秋のせうらく
「たつまの峯乃北いゆるあふに秋のなかに
昔建保比撰ありひ拾みらる人いしらハおそらく
しこ云事まてくしとも先の比ハさるまねるも多
く作ら人これハ面龍あまりて白雲とゆる座
白雲乃讀ありゝ筆に出す月のこ字も風を便り
に乃字このおく歌合に歌小野小町花の色ハうつりに
けりな讀る歌ニテりよふる称世ゑまりハ挟秀逸へハ何事よ
天の門月乃こ字の乃かりきにこのくハりやうそくまてまへく

のなりも大井川よりやさしかりけるやらうのす
八日なおもしろくとても識しるこにはいふべくなり
新後撰 雲掃ふ夕風さそふ谷の葉の下山かげに出る月かな
たゝやうにそへてくもつくしうそあるものぞ
一 さぬ風重ハいつもかはらぬこのゆふ山のあさぢ秋の月
鶉なくなれるのあさぢが露のうへおとこぞかなしく月ぞ宿れる
寛回るりと見たるやうにやも覚經漂とるな
中くにまろく見もあかたおあさのちりこの杜の月哉
見まこ漂ふ段
一 漂の生乃生田の森よ人いとく月まとゐよるの秋も

一 宇治山の橋よりけふこほる波る秋乃月かげ
宇治山のをちかた人舟渡ぬ見え姿網つつぞ記
岩よりも志かる川の松のかげくもる月ぞ見えける
見いとて人たらくこゝより力ある松段
一 舟よりの波霧晴て鳴くくれなる月をみるな
舟出しも今も越つれ小鴻乃秋の宿
磨のくれ段ちらぬ末をこゝろせ月よ横こゝろあるのつまど娘
以上三 腰漂ふ段
一 波やまろ風からハ荒果なくやにや川の末来むらん
いくみかさりのぞく林のよハ笠さても舞まて月出る

第四句やすらかならぬにや欲

「津守もさだむる標と根ざんあるて塩やけあるそのゝ月

「うらみつる煙もうちなびく風にもあらぬのとまやのあさぎりの月

「武蔵野のうらうらと関屋の名のとしてとあはれ月の出の名

「生明のつきたる空に住麻も月に別るゝ苦しさやあくらん

うき雲をさそひやまのおもてにかゝる夜半に別るゝ秋の村雨

あらし吹く面白く見えしはへとも主(?)かね方明の暮巻ら

作

我思ひの程をやあまたれおもひかならん人もも刈萩の秋の村雨

八重立つ萩の門をたゝきて誰かとへとや萩はちらさはける

第三句不優にや

「露結ぶ小田のかり庵の月影にやどる稲葉の秋のせはくて

「いかに明かしかねらん旅寝には袖ある人の袖のあさ風

續後撰 小鳥狩せし秋風とみなはひとり行

る人の夜さむしとや歟

「いまこそは風ふきし今はあやしの夕暮はこゝろもうつらん

續古 「草葉の秋萩をとのみ秋風にたえまなく夜今やうつらん

寂しさは住居してたゝなかしたゝの枕の上にて夜さむ門に来

うらみつゝ浦風さえて行くさきの村雨の里は夜さむつゝ也

以上二首深からぬ人

同 立田山時雨ぬるこれ乃秋風にまかりつるふ心ある哉
同 小初瀬乃山の木丸紅葉深つらん伏見の小丸に時雨ふるらし
同 時雨つる紅葉の山に雲晴て夕日うつろふ森の秋風
三たふちれ分そ川山を時雨たる時雨もこれ紅葉いまうつろへ
山乃岩清水うつろへる也
同 武士丸やしほにそめる紅葉やまもとこれ色の梢なるらん
同 嵐の音たえて時の山里と紅葉にまたふる人もこゆる
同 露ふかき庵花のもとのあらくれさそふあはれの萩の庵
同 なかきよ丸竹田の原のもろくも紀に哉こゝろにやなるらん
同 又萬葉ほとゝきすならぬ秋の世にはつらむて 松虫のこゑ

同 祖も時こそ丸も秋は悲しき武蔵野に独と出れなくらん
同 くれても秋はとまらぬ夕風にいそや山の人乃心こそ京
同 久せ丸天乃岩戸の関路にもとめて秋乃名やもりん
此岩戸の関新勅撰後鳥羽院御製 尚珍しき人

冬二十首

同 常盤山きはに時雨めぐとまる山の上に色のかれる
同 秋の色と見ても末にも深くて竹の葉そよぐ嵐時雨
同 う丸雲はれぬる江の月影にさえ丸のこゝろの松の世
擬古 同 深垣やく櫨を雲丸嵐に時雨ぬる木のこ風
同 志ろう人なしと山風にそとはたらくよはうち丸

氣多以前 言上人

積りては おちばやあらん三室の山嵐におほふる峯の紅葉

はるひり来ぬとやゝくせにまぎれてたゞ山の水

菊の咲籬や山もと三つかんなの秋の色乃庭まする

さらひはらそふ梅と花里に吹秋の後の夕暮の空

見もわたせ夕べゆかて槿のかれたの上におけるあさしも

以上二首御禅荷首以歌

〔横古〕日頃さへ枯野の萬露をかけてもゆかし秋よりまさる露哉

露にうつる嵐の月の夜をなみだ落ぞ明て千鳥鳴也

おりよや浦の秋かくやまた泉川つゝきあさと千鳥鳴也

行へしらぬ岩間の浪の音さへも住よりこゝろなきものを

むかしの浦の汐ひの方ふ汐よる千鳥なかしゆふけぶりと浪

以上三首隆と秋ひ

春宮の河原の千鳥かよひ路を不風吹して左明 契月

河原千鳥を人歌

梯にも天の人乃袖の上やたのしき露をとて左あるる月

まさか音子の袖よさむてなつも夕風さそひて霧かゝる也

露をあゆみをとれ人なきはうつり人の枕ならん

立の月の光儀のさしのぼるつゆもて一夜の枕に宿を結ぶ

さりてたゞ宗しく月をも一本れあみる尾の雲に宿かる

波くゝるむこの浦風寒さえてあらし凄まじく雪ぞつもれる
白と申事又己父中旨なきこと
吹おろす嵐の山おろし今朝さえて名雅とはいふも雪そ降て（冬こもるイ）（まさる）
白雪丸とつく峯丸若延松のことぞいはれける
よもすがら山は降にし紫とはあたらしく雪も見ゆ大原の里
竜とこそ小松かけの白雪と日影やさえてあらしふくらん　群
以上四首僕と存し候て在る下
一まさごのやまつさきろ雪やとまらん都まで志かねぬ我の玉水
一風くさぬ冬木の梅乃竜の枝まて見えてつもろ白雪
一雪のうらに見やくやく山や富士の根まで出るぬ穂高かる覧

一旅の夜霜小月と源かでとは過ぬ者とこえし年の今
点七十首
明日よりは人のくだりて秋の見やまざとの夜かなかる覧
上句おあまりに詞おほくやは覚
一点そむるかゝる夜の床にまとひ涼しくなと志らせ（武）
一秋のみる花涼の下夜人こそ志らねわれぞこひ侘（志）
中かくによ我もかしともふかく人めを忍ぶ哉を
是又上句うるとかくと覚らん
一思ふ山のおくに立まる晴ぬこそいはしるらぬとも知し
一人志れぬ思ふの山は鳴鹿も志らて妻をこふらむ

「秋のよもすがら忍んでや逢坂山の名ハ忘られ候と
「ふくるもいとゞそのもりのしめ縄かけしや仲と思ひし物なん
赤もねさしむ思ひ出なれあかりしてあらぬ袖を絞やらん
種よらぬ集巻ニも多く此ほど古今ニハ少く歟
「下もえし我あかれぬくも此夕煙ハ絶ず有らん
物おもふみし思ひくれきも其のなかとも見て籬浦風吹
数ならぬ身しゆかれのと新勅撰に詠し此歌
「思ふのゝ心こえて物思ふ身に我忍ぶやく浦の煙の行方
「さとの梅や我宿に住あまもの身となりし物や其すまひ
消へかくもかきらへかくて煙の夕暮悲しき

柳ねし白く
「下燃に忍ぶぬ煙ハ未だおもやるせなき名の立ちなん
「人も忘れはてぬやうにて其の下煙ハいかなる様ハいふ名たゝん
まつあふぬつらさも人の身を思ひやりて物と社ありける
「稲とも鴨のこゝあまれし身のうつらからあそこも人あふはかぬ
「いふしてそのよもとかと思ひしハつらさに別ぬ人成ける
「占とらもこひらふるさとかな秋のつらき人をば思ひ来ぬ
「よなとし絶ぬハ果ぬるらいづくに独月に秋の哀し
「庭つまかわのとの我とりくあらのにはかり乱れてそ宿
「やまとをみれゝんの心かはりて人の家をとらむかへて成共

「住吉」そなたのおとなきにまさるてもなれくの花乃たゝらしれも色
「時雨にもつれし袖には松ハあらぬ挿をぬ淵にゆくへ知らでそあるかな
神ぞ館乃泪の露やいろいろに秋の哀はいとゞいはるゝ
無楮要文字錦を強不の好し宅乙只同少はし以歌
同をり忠吉上イ
「かし俺る袖の露は何をたかみ果敢も秋そ家ハ並はる
「植の家の袖や昔れ桂なりぬつてもなくくまそとおなをも
「麝なかハあき児ハ人の契のみ哀袖つゝ彼ハ知る様もなかし
「あらきこ私や人乃心のうつろはむ哀に和らぬるこなみ乃限りに
「哀なるみ身のうらみはる偽の人乃教へをあくまあまりし審

「むかしひとり契よりは岩代の松ばかりなしとこそ思はれさらん
「中くにかぬはぬらぬ見ぬで思ふれ私なる人の心乃かたちなるらしよ
「小夜更ともさこそや待らんはまてさよいたりし挿たる人の玉章
哀なりし人限さる思ふこぬ人のなん見え我らん九月の郷
身の四句に優る歌
「叢秋乃泪の露をはらひも子揖る袖に月をとしるる蘇
「挿かの秋ゆかなしきの月影を泪のいろの何かるらむらん
「いのちすに日も暮してかけしかるそれの時もあひ難き契あれハ
「あ明を何つれしふしと思ふらんらひて見に月を見れなし
「曉ハ我みうきこそもいましのかぬ別れの恨をわぬ思

暁 暁ハうれしき事迄ハあふ坂の夕つけ鳥も鳴やゝ鳴る(?)
暁 恨てのこるやゆかしむ別路に於ける(?)くやまれ下らせ
それなくを契ても捨(?)のかなしきさハ定家(?)さゝの暁乃ころ
存有ハ同前也
忘まつとはいひて別し暁も袖にぬらす袖乃ゆゑん
なき人とゝ人あらむ出てはいかにや忘らるゝ身の袖ならん
以上二首又源氏也
有明 有しよ月我を何を詠まし月に別ぬるゝむせん
別 別しに契らざりせバ葉でしらバよるれ書又貞家道 秡イ
高山も后路に逢よにそれその中に別て人を云物とハ
別 かつらきや久米の岩橋神のまゝ絶し中なる後はまゝん
別 うたゝねに契はかなくみし夢も我忘るゝもなくさめまさん
夢 夢の中にいかでや阿波にかへるをしもぬれし衣の浦なるらし
みる夢の名残もつきて今ハかへらさる捨すんよしなれさてそも
以上三句夢合欤
ともかくも夢にかへりぬほどなくても小枕なるれさ
玉かこれみとり人部なくやさ月と八雲桜散木の下
風かいふて詠るも文字紀
恨 恨人すゝ衣の裏かへしてもめぐる夢のなしハ縁
夢よくもかく逢さんまではぬしねとやぬらしいまも辛さ哉

こしは旅のならひなれは夏路もたゝへかゝ中ハあまに涼しもあり
已上二首又涼しきは
まちこかね来ぬ玉れとハ斗へて来ゝし中れ夜しぬ扨とん
月たつ海乃庭の玉すのゝ〳〵れよ吹て花の上毛まよひ之
新續古
夏衣袖ハ露しれ汐瀬よひ乃のいや来くる中花かりしさ
あまてらも今ハ夏しき〳〵つ王え見ね枝まさく露の消やさておん
あまてハ夏も見ゆる手いつまくかゝるけて夜ふち嵐ゝへ〳〵
夜る秋よ月のうつ空ハ満もあく太ゝ過れし袖乃月のけ
月とあまよ乃袖の月かけ更よなりゝる秋つき見ね末の分まき年
已上又涼しきは

おく露もあさかれあかし人の手にとらせる秋乃夜な〳〵
引つらてしまふかれとや夏衣かさ重ね憂す君志てける袖の露かな
あつさ来る殺氣も夜も枕になれされさハうつろふ人の心たゆるなり
うつり行人乃心のうつれなりて後世のけしく何とかのむしろ罪
まへに涼しき歌
続後拾
逢坂の夏路よあふさきねならむ枯よし後ハ分る人もなし
風ても里ととなれぬ人そうつるゝしさ秋と雅とまちなん
続古
夏葛木らうらしたれ秋風やかまてくにぬへしめ成らん

雜三十首

忘られん月日へなるを立別いなその山の花乃しらくも

續古
旅ねするうらのかよひぢかよふらん 波こそゆめのうきよなりけれ
いかにねて見えし夢も絶えなん草枕 あらし吹くよのさやの中山
月影は宵は山の端よりて誰か京に枕中に羅
且心不分明ならず覚ゆ 読人

續古
岩代の松の下枝の草枕 またぬ夢をもかはしつる哉
さゝ枕いくよのまくらにむすびけん 一夜あかせし露の契り
旅夜庵 花の露と行なりて眺むるも 波のうきねして分
京氣殊勝了 但備正遍照風情やるせ なし
風のやすらふ枕夢さめて 猶もまつ秋風の物
旅ハ夜を浦の波の磯枕 幾日旅ねても波よりぬれぬれ

見えぬなるなる人のよみてふ分明は暫巻頭は
うき枕ふくしらなみの磯の波 そよぐ波の音たかき
何の名もしらぬ白雲のあはれ見して 但旅ねなる所也
五湖とまて旅枕の富士の根の絶つらしけ分き 標
すみかなる富士の白雲消る日はあれども 標なる日はなし
續古
見え浪を八重風あらし 蜘蛛の小松はらまつ人はしらるる
かゝる神袖の浦のあまの人を待つ人も行くより ふれつ
出てこる向の尾花よる草葉よみける月の夜の明
以上 風ふく 念して 詠る人
國の苦尾の松乃つまとうつゝにかりける霜とも見て行ける

賤がすむ外山の松のつまとおもふすれや里の煙かすむらん
都人とはぬものから山里はさびしきこそすみよかりけれ
きて訓ぬ松の嵐もかよひくるおもひしらするものなれや山里の事
源山辺里ふく嵐は不て詠し里も又あはれ出ける所随分制上
山里は都に遠くそろそろあはれ松川ても風乃音はさびしき
吉野はうきよりも旅は山の松風にきえぬらぬ波の音にこの哉
一つとし不遠寄る歌
敷島や大和島ねの君までも渡せはそこにかよふ乃うらの橋
裳の関小松の葉や世中ねくさもなくもしげり成らん
桃にあふさかの関のきはさやよそ月日のたゝすすむ哉

一渡る為昔の跡を為ても松さえ老ぬる身ぬわか恋をし
元中くも角とこ紙言上ひ
千年山その昔の人れ不思はりうつつに若乃色の郷
新後撰 廿山出似大嘗会京の歌
住吉の浦かくの松のいとうち冬かはてや神もうらみん
千代の山内山の峯の雲はやうしのみ気のつもるらん
百敷やあまてる神乃まもりを鏡にうつる御影もちせむ
鎌倉殿御談事中入ろし處は日如此御法不
拵し昔までそ注申給て某も可ありて使御氣色
了承候隨儀て

十月六日　宮内卿資平奉

謹上　大納言入道殿

此一巻給てはんまいらせ候、大かたこれも詞もふる末代よ
ハ哥もあまりかくて成候ぬと存候へるにくやさらか
不出来て侍事在世のてあもたのもしく存まゝ文
さる人ともおと見えたる哥とみなされて作面白ぞ
たくさまも人中く絶え一詞とろのみえんまゝの
へかくて定家ハ八十一に成とし候成よ四十余年
そこいてとむかしかハ中をとはれてまん融覚ハ八十
ほとくんし定家に四十余年かくさハして申る時

こ承候出てすめも今に云さこれしまもこのやう
のさらよ世哥ハよむへきこやうに申候しかる在世
不堪ゆ計ニいてもも庭のおしへ計ハ従よ承並て候へ
とも年老て後ハ心もうせて候やうよ候成て年
もわかき人の槇よもいかにともいのめつらしく
目出られて候事なくあるまし一世ら作たらにかす
も覚候てのやうに申されさきくこれハいておほへ
猶候此度勅撰よハ力つさて候ぬと覚く自稿
おかく成て時よいそれはく存候て得其様御披露候
そしと侍ん得申させおハしまれへく候あなかしこく

此由をすへいゝやうに被申ければ上にめでたく〳〵讃
金葉の比哥がらはしらるゝやうなる物のまで其うらへん也
さいまいうをば上にたる紙の比哥のうへかきうらせおきて
哥しちんけるとかく自然見をとてやうに申よせ申て
されけれどもあはれ此哥此に経かしきこ御書すゝのく
らはれまいらせらしてうんまざにはおそふて見らん
以来書之者九条前内府被注之
此抄御哥先年書写之所為人被借失畢爲後本書
之畢　　　　傾河
右三百首以屋代弘賢本挍合

七夕七十首　　　　従三位藤原為理
七夕天
あまの川くものうちはあけぬまで人まちがほにゆふぐれの空
七夕日
まちかねてさへあまくもや猶もいそくらん暮やとさ日もなかしに
七夕月
たなばたのわたる天川秋と契りし月はなさむのはをやすとまで
七夕霞
織女はたゞさやかにはあさかはも見せぬ思ひは霞やなえん
七夕風